The Historical Society of Japan

指昭博著『イギリス宗教改革の光と影――メアリとエリザベスの時代――』（MINERVA西洋史ライブラリー 90）

青柳かおり

本書は、著者が二〇〇八年に大阪大学へ提出した博士論文「近世イングランドにおける教会と社会―メアリとエリザベスの時代―」をもとに加筆修正、再編したものである。本書の構成は以下のとおりである。

序章　メアリ一世の時代
第Ⅰ部　メアリ時代再考
第一章　イングランド最初の女王
第二章　トマス・ワイアットの乱
第三章　出版統制とプロパガンダ
第四章　メアリ時代の「教会改革」構想
第Ⅱ部　教区の動揺
第五章　翻弄される教区教会
第六章　妻帯聖職者
第七章　変化する聖職者の地位
第八章　ヨーク聖史劇の終焉
終章　メアリとエリザベスの時代―歴史に刻まれた光と影
参考文献
あとがき
索引

序章では、エリザベスとメアリに対する、一般および学問の世界における評価の違いが述べられている。エリザベスは近代イギリスの隆盛の基盤を築いたとされ、華やかで神話的なイメージがあるが、一方のメアリは血まみれのメアリというあだ名をつけられ陰惨なイメージを持たれている。このような評価の違いには、エリザベスは国教会を確立したのに対して、メアリはカトリック信仰を復活させてプロテスタントを迫害したという宗教的要素が関係している。イギリスは宗教改革以降プロテスタント国家となり、カトリックへの恐怖や嫌悪感が強く、「反カトリック」意識がイギリス国民のアイデンティティを形成してきた。さらに序章では、ヘンリ八世からエリザベス治世までのイングランド宗教改革についてのイギリスにおける研究史がまとめられているが、メアリ時代への評価は否定的でカトリック復活の反動やプロテスタント迫害の時代とみなされてきた。メアリ時代は取り上げるまでもない「不毛」と一時的な「逸脱」の時代という評価がなされてきた。しかし、著者は歴史においてまったく「無駄な」時代は存在しないと考え、メアリ時代がそれほどまでに否定的で混沌とした時代であったならば、その混乱がもたらした影響を無視することはできないと述べている。

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

次に宗教改革をめぐる修正論について説明されている。代表的論者であるクリストファ・ヘイグは、プロテスタントの役割を強調するA・D・ディケンズを批判した。ヘイグによれば、ルターやカルヴァンの思想は民衆にあまり受け入れられず、反聖職者感情も一般的ではなかった。むしろ、宗教改革前夜のカトリック教会は十分に機能しており、伝統的なカトリシズムが根強く残存していた。プロテスタントの教義に共感したわけではない人々が大きな混乱もなく宗教改革を受け入れたのは、国王の権威への服従にすぎなかった。このように修正論の論点はまとめられる。修正論はメアリ時代の意味を問い直すことにはなったが、エリザベス時代初期の社会が分析の中心であり、メアリ時代を正面から扱った研究は少ないという。

宗教的には中立ではない研究もみられる。たとえばJ・J・スケアスブリックやE・ダフィは、はっきりとカトリックの立場から宗教改革史の見直しを試みた。特にダフィは、良好な状態であった民衆のカトリック信仰を宗教改革が破壊したとして、メアリ時代のカトリック復活はそれなりに成功を収めたと評価しているという。しかし、それでは宗教改革の影響をほとんど否定し、ヘンリ八世・エドワード六世のプロテスタント化の遺産を無視することになってしまう。著者は修正論に対して疑問を呈していて、修正論では教区民の保守性、カトリック信仰の維持が強調されすぎで、メアリ以前のプロテスタント化が人々の生活に及ぼした影響も考慮する必要があると主張している。

本書の目的は、修正論の議論を踏まえてメアリ時代を宗教改革史の流れの中で捉え直し、メアリ時代からエリザベス時代への移行を考察することである。第Ⅰ部ではメアリ時代の性格を議論し、宗教政策においてどのような問題にメアリが直面したかを明らかにする。第Ⅱ部ではメアリ時代からエリザベス時代への移行期に教会や教区、俗人が被った影響や変貌を明らかにする。

第一章では、メアリの生涯をヘンリ八世の離婚問題、メアリの即位、スコットランド宗教改革者ジョン・ノックスによる女性君主否定論、それに対するメアリの神話的イメージの利用、スペイン皇太子フェリペとの結婚の順で概観している。

第二章では、トマス・ワイアットの乱の経緯と研究史が述べられている。当時のロンドンは反カトリック的であったと考えられているが、ロンドン市民はワイアットではなくメアリを支持した。プロテスタント信仰を抱いていたとしても、メアリへの忠誠を信仰よりも優先させたとも考えられる。さらに、市民はスペイン人よりも反乱者による略奪を恐れて反乱を支持しなかった。まだプロテスタンティズムがイングランド全体に浸透していなかった状況が示されている。

第三章では、メアリ時代、大陸へ亡命したプロテスタントによる出版を利用したプロパガンダが成功した一方で、メアリ側の出版・言論統制はむしろ「失敗」したという通説が批判されている。メアリ側は異端や反乱者に対するさまざまな布告や法律を公布していた。出版物の内容も、プロテスタントの著作が強調されるべきではなく中立的であった。

第四章では、メアリ時代の宗教政策が過酷なカトリック反動、

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

プロテスタント迫害であったというネガティブなイメージに反論している。教会政策の中心人物であった三人の主教を中心に、彼らが決して血に飢えたプロテスタント迫害者ではなかったとしている。また、カトリック教会を再建するために、教会巡察や修道院の建設がなされたこと、プールの教皇使節教令が出版されたことなどが明らかにされている。

第五章では、宗教改革期、国王やジェントリによって教区教会の財産が収奪された様子や、メアリとエリザベスの時代における教区教会の変化・混乱が述べられている。略奪者はプロテスタントに限らず、カトリックに共感する者でも修道院解散がもたらす利益に与ろうとしていたという。メアリ時代に教区教会を回復するためには費用がかかり、内部施設が荒廃している教区が多かった。聖職者も不足しており略奪された教会の回復は困難であった。教区民の動向は複雑で、宗教が一致した状況にあったわけではなかった。

第六章では妻帯聖職者の聖職禄剝奪の問題について述べている。エドワード時代に法律によって聖職者の結婚が認められたが、メアリ時代になるとその法を含む宗教改革諸法が廃止され、さらに勅令によって妻帯者は聖職禄を失った。妻と離別してから、他の教区で再任される者もあった。かつてプロテスタントであった聖職者の中にはメアリ時代になると無節操にカトリック体制に服従した者もいたので、教会の権威や教区民からの信頼が低下していった。エリザベス治世になると、女王は妻帯聖職者に嫌悪感を抱いていたが妻帯は黙認され、多くの聖職者が再び結婚した。

第七章では聖職志願者について分析されている。イングランドでは、聖職志願者が宗教改革の開始頃からエリザベス治世にいたるまで全国的に減少したという。宗教的な理由で迫害・処刑が行われていたことが一つの原因と考えられる。また、司祭が聖職禄を得ることが困難で経済的な面で教会は魅力を失っていた。しかし、人手不足の状態のために聖職禄獲得の機会が拡大した上に、エリザベス治世に教会が安定したこともあって、治世後半になると聖職志願者も増加し始めた。

第八章では、ヨークにおける聖史劇と中世都市の文化について述べられている。聖史劇は一四世紀後半頃から始まり中世に盛んに行われ全国的に広まったが、宗教改革期に衰退した。演劇の上演はギルドにとって経済的に大きな負担であり、また、プロテスタントから見れば、演劇はカトリック的・偶像崇拝的なものに映ったからである。人々の中には復活を望む声もあったが、一五七〇〜八〇年代にほぼ同時に各地で最後を迎えた。

終章では、修正論について、従来のメアリ時代の不毛のイメージを変化させた点は評価できるが、教区教会レベルでの良好さまでもが強調される問題点を指摘している。また、今日では、修正論の立場に立ちながらも各々が描く宗教改革像は極めて多様であり、新たな共通した宗教改革像はあいまいであるという。

本書は、イングランド宗教改革についての研究の中でも、これまで軽視され評価が低かったメアリ時代を中心に扱った研究書である。一般的に、メアリは強硬なカトリック教徒で残酷な女王という負のイメージがついている。一方のエリザベスは華やかで神

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

話的なイメージを持たれている。二人の女王への評価には大きな差があるが、本書はメアリ時代に光をあてようとするものである。イギリス（イングランド）宗教改革は非常に複雑である。中世のカトリック教会、ヘンリ八世治世のカトリック教会からの分離とイングランド国教会の成立、エドワード六世治世のプロテスタント化の強化、メアリ時代のカトリック教会への復帰、そしてエリザベス治世の国教会の再建、というように体制と宗教がめまぐるしく変化した。その時代に生きた人々、聖職者の信仰や生活は非常に興味深いテーマである。本書によって、この中でも研究のうすいメアリ時代が明らかにされたことには意義がある。

イギリス宗教改革に関してはイギリスにおいて膨大な研究の蓄積があり、現在も進行中である。第二章のワイアットの反乱だけでも、研究者によって様々な説が唱えられている。序章では、イギリスにおける宗教改革についての研究史がまとめられている。これまでの研究では研究者の信仰が研究に影響を与える場合があったが、著者は通説や修正論をふまえて、プロテスタントやカトリック、どのような立場にも偏ることなくメアリ時代の宗教と社会を明らかにしようとしている。たとえば、ダフィやヘイグの主張と異なり、人々の間のカトリック信仰の強さを過度に強調することもなく、公平に記述している。本書において、メアリ時代はカトリック教会へ復帰したとはいえ、宗教的・社会的に混乱していたことが明らかにされた。

次に気が付いた点を述べていきたい。本書の副題は「メアリとエリザベスの時代」となっているが、内容はメアリ時代に集中しているためバランスが悪くなっているようである。副題と内容が合わなくなってしまい、むしろ、エリザベスを取り、「メアリの時代」にした方がよいように思われた。著者もあとがきにおいて、全体としてメアリ時代を扱った章が多くなり、バランスからして「メアリとエリザベスの時代」という副題はそぐわないという意見もあるかもしれないと述べている。それでも、特に宗教問題に関しては、直接触れることはなくても、エリザベス時代の存在は常に意識されているし、二つの治世は密接に結びついているという。しかし、「メアリとエリザベスの時代」という副題をつけたのならば、エリザベス時代についてもっと多く記述しないのはなぜであろうか。評者はエリザベス時代のカトリック教徒やカトリックのネットワークに興味があるので、残念であった。

本書のタイトルは『イギリス宗教改革の光と影』となっているが、実際はイングランドの宗教改革についてであり、スコットランドの宗教改革やメアリ・ステュアートについては触れられていない。スコットランド女王メアリについても書いていただきたかった。参考文献リストでは英語文献がすべてまとめて書かれていたが、一次史料は何を使用したのかがわからなかったので、一次と二次を分けて書いた方がいいのではないであろうか。

著者は序章や終章において、これまでメアリ時代が不遇な扱いを受けてきたことを強調している。宗教改革以降、近代イギリスにおいては反カトリック意識、カトリックへの嫌悪感が強いため、どうしてもカトリックへ復帰したメアリの評価は低くなる。メアリは研究上見過ごされてきており、一般受けしていないが、著者

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

はそのような人物を研究対象として意義を見出そうとした。評者も著者の姿勢には共感できる。しかし、それほど評価が低く短期間のメアリ時代に意義があると主張するならば、本書ではその根拠が弱いように思われた。メアリの研究が少ない、メアリは影の存在である等、メアリ時代やメアリ個人の扱いが不遇であることはわかるのだが、評者にはメアリ時代の重要性があまりよく伝わらなかった。たしかに約五年間のメアリの治世は短く、彼女がカトリシズム復活を成し遂げることはできなかったので、メアリ時代を高く評価する研究を行うことは困難であろう。

本書では宗教改革期におけるカトリック信仰の強さを強調しすぎている修正論を批判し、公平に記述しようとしているのであるが、一方で著者の主張があいまいになっているように思われた。著者は基本的に修正論に同意しているが、社会におけるカトリック信仰の強さを過度に強調することには批判的で、公平にプロテスタントの影響も考慮すべきであるという立場であり、評者も同意見である。しかし、イングランドの宗教体制がカトリックからプロテスタントへ変化した後、カトリックに復帰したメアリ時代の社会が混乱していたことは明らかにされたが、著者は人々のカトリック信仰や教会におけるカトリック的伝統の強さを述べることに対して、あまりに慎重になっているように思われた。修正論ほどではなくても、メアリ時代の意義をより明確に主張した方がよいのではないであろうか。

本書ではあまり触れられていなかったが、メアリ時代のカトリック司祭の教区における活動や、地方の名望家や民衆に彼らがどのような影響を及ぼしていたかを明らかにする必要があると思われる。エリザベス治世のカトリック貴族・ジェントリは、カトリック司祭を支援して信仰を維持していた。エリザベス治世初期のカトリシズムについて、ジョン・ボシィやA・D・ディケンズは、民衆は保守的であったかもしれないがカトリック教徒とはいえないとして、メアリ時代からのカトリック司祭の働きやカトリシズムの伝統には否定的である。そして、一五七〇年代からイングランドへ渡ってきた宣教師やイエズス会士の布教によって、カトリック教徒の民衆が増加し、カトリック貴族・ジェントリも信仰を守ることができたと見ている。一方、ヘイグはメアリ時代からのカトリック司祭の活動を高く評価しており、彼らは、特に北部において禁止された祭壇、聖画像、聖水、ロザリオ、十字架などを教区教会に残して、民衆のカトリシズムを維持したという。ヘイグの研究はエリザベス治世が中心であるが、さらにメアリ時代のカトリック地域社会について解明していただければ、メアリ時代のカトリック司祭の活動がカトリシズム存続に大きな役割を果たしたことが明らかになるであろう。

さて、よく知られているように、イングランド国教会はプロテスタントでありながら、組織や儀式の面においてカトリック教会と共通する部分が多いといわれている。国教会の礼拝や儀式、聖職服の規定を定めた祈禱書にはカトリック的伝統が残されている。評者の関心からの要望となるのだが、エリザベス即位後、一五五九年の祈禱書におけるカトリック的要素はどのようなものか、また、それらがどのような基準で残されたのかについて明らかにし

NII-Electronic Library Service

The Historical Society of Japan

ていただければと感じた。一五四九年、イングランドでは中世カトリック教会のセーラム式文をもとに最初の祈禱書が作成され、一五五二年にさらにプロテスタント化した第二祈禱書が作成された。カトリックのメアリ時代にどれほど祈禱書が人々によって使用されていたかは不明であるが、一五五九年に第二祈禱書を保守的に改訂した祈禱書と礼拝統一法が制定されたのであった。エリザベス政府と国教会は、イングランドの祈禱書の中で最も急進的といわれる第二祈禱書を、どの程度カトリック的に改訂したのであろうか。カトリックに復帰したメアリ時代および、穏健にプロテスタント化がすすめられたエリザベス時代は、国教会におけるカトリック的伝統の維持にとって重要な時期であったと考えられる。

評者は宗教改革の専門家ではないため、もし読み間違えや誤解があればご寛恕願えれば幸いである。本書はメアリ時代の宗教的変化、政治、社会を明らかにした貴重な研究である。また、終章の最後に著者が述べるように、宗教改革によって国家教会体制が成立したことは、単に神学の問題に留まらず、人々を巻き込む政治・社会的な動きであったと思われる。本書をきっかけとして、宗教改革史のみならず、近世イングランドの政治、社会に関する研究が活発化することを期待したい。

（ミネルヴァ書房　二〇一〇・一一刊　A5　三一四頁　六〇〇〇円）

『史学雑誌』投稿規定

一、投稿は会員に限ります。

二、投稿を受け付けているのは、次のもので、公刊されていないものに限ります。

論文
研究ノート
史料紹介
研究動向

報告集等に掲載されたものをもとにしている場合は、必ず投稿原稿にそのことを明記し、当該の報告集等を添えて下さい。

三、原稿は和文、縦書きで、**四〇〇字×八九枚を上限**とします。A4用紙一枚に八〇〇字で印字して下さい。図、表は『史学雑誌』一頁大の大きさを四〇〇字×四枚分と計算し、本文、注、図、表の合計が八九枚を超えないようにして下さい。

四、原稿には必ず和文要旨（八〇〇字以内）を添付し、論文、研究ノートの場合は、英文要旨も添えて下さい。要旨のない原稿は受理しません。採用になった場合、『史学雑誌』には英文要旨が、史学会のウェブサイトには和文要旨および英文要旨が掲載になります。

五、二重投稿は認めません。

六、原稿は史学会に郵送して下さい。原稿、要旨はともに二セットお送り下さい。

七、写真、図版、特殊文字等により印刷経費が超過した場合、その一部を負担していただくことがあります。

NII-Electronic Library Service